

〔地域散歩・深谷〕

埼玉の偉人と坂東太郎

小林 秀 樹

((国研)農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生部門)

All about SWINE 60, 39-42

「埼玉三偉人」と検索すると、「渋沢栄一」、「塙保己一」そして「荻野吟子」の3名が挙がる人が多いと思います。いやいや「熊谷（くまがい）直実」や「畠山重忠」も居るのではないかといわれるかもしれません。いずれにしても、渋沢と畠山は深谷市、荻野吟子（旧妻沼町）と熊谷は熊谷市（熊谷市の語源だがクマガヤシと発音。お年寄りには未だにクマガイと発声する人もいる）、そして塙（旧児玉町）は本庄市にゆかりのあるもので、塙の生誕地が利根川水系の神流川沿いであることを除くと、4名とも利根川本流（坂東太郎）沿いであり、埼玉の北部出身です。現在の人口は埼玉南部に集中していますが、私の小学校時代の地図帳（1968年頃の統計）をみますと県南人口は今よりかなり少なく、戦前は荒川と入間川の流域以外の砂地の丘陵地帯にはあまり人が住んでいなかったようです。

かつて坂東太郎は江戸との水運交通の役割を果たしていただけでなく、幾度となく洪水をおこしました。私の実家（旧明戸村、現深谷市）にも昭和30年台の床下浸水の写真があったのを記憶しています。さすがに物心ついた頃から洪水を見ることはありませんでしたが、実家の裏の治水工事（河川改良、土手の盛り上げとコンクリプレート

はめ込み）は平成になってから漸く完了しました。おかげでシジミやウナギはいなくなり、クワガタの採れるカワヤナギの木はなくなり、釣りのスポットもなくなってしまいました。

洪水による上流からの栄養分の高い表土の堆積は表土層を厚くし、ネギ並びに大根、ニンジンのような根菜類のみならず各種野菜の生産性を著しく向上させました。「深谷ネギ」は有名になりましたが、そもそもネギという作物は根の部分まで全てを収穫するため、いくばくの栄養分も土中に還元できません。加えて他の野菜よりも多くのミネラルや栄養を吸収します。そこでネギ苗を移植するときに稲わらを床敷きとして入れることで、ネギの呼吸を助け、朽ちた稲わらが有機肥料となります。なので、どこのネギ農家も水田で稲作を行い稲の収穫にはコンバインでなくバインダーを使用しました。結束した稲わらをさらに軸木を中心に放射状に結ぶと、あたかもモンゴルのゲルのようなかたちになり、それが畑のあちこちに見られるのがこの地域の風物詩でした。それを見た東京方面から来た豊職人が稲わらを分けて欲しいと訪ねられることも少なくありませんでした。稲作はもちろん米生産の主目的ですが、むしろネギのためだったと思えます。実際に、この地域では一

反(10a)あたり、10俵近くの収穫が有るのでありますが、高温障害や風に強い品種でなければならない条件があつてか、残念ながら食味はそれほどよくありません。関東平野で山などの障害物もなく、日照時間が長く温度の日較差の少ない場所での米作りは収穫量というメリットだけでは、時代に合わなくなりました。一方、いわゆる二毛作として米の裏作として小麦を作っていました。かつて埼玉は北海道に次ぐ小麦生産県だったので。子供の頃、赤城おろしが吹き始める前に麦踏みを手伝うのが辛かったことを思い出します。そのため埼玉中央以北では米よりもむしろ小麦粉文化が定着し、今では県が「うどん県」としてご当地うどんをPRしているようですが、深谷の「煮ぼうとう」や上州の「おっきりこみ」、行田の「フライ」などが老舗だと思っています。話を「ネギ生産」に戻しますが、現在のネギ苗の植え付けは農機具のすばらしい発展と化学肥料のおかげで稲わらが必要としなくなりました。唯一、厚い表土だけが「深谷ネギ」を支えているように思います。そういえば、圧搾空気を利用したネギの皮むき機を発明したのも近所の町工場のおじさんでした。彼のすばらしいところは、機械を安価で早く普及させ農家の負担を軽くしたいと考え、あえて特許申請しなかったことです。

洪水の影響で旧明戸村は瓦(かわら)の生産に適した厚い粘土層が所々有り、子供の頃はあちこちに瓦工場(といっても家族でお手製の登り窯で焼く家内工業)がありました。工場横の田んぼの土を機械で捏ね、圧延して整形され長く伸び出てきたものをピアノ線で一定間隔に切る工程を見るのは楽しく飽きることがありませんでした。この明戸の粘土に目をつけたのも渋沢で、深谷市上敷

免に「日本煉瓦(製造)株式会社」を設立し、国産煉瓦の大半をここで製造しました。東京駅丸内の赤煉瓦駅舎も深谷の土で作った煉瓦です。この煉瓦工場は私の中学校から近く、写生大会の会場によくあてがわれました(又は黒胡椒せんべいで有名な深谷せんべい工場)。当時、昭和初期以前につくられた古く危険な部分を除けば、大半の部分はどこでも入れました。シンボルともいえる古い大きな煙突が数本あり、ほとんどの写生画にはそれが描かれていました。しかし私はその煙突を描かなかったため、入選することはありませんでした。現在それらの煙突は取り壊されて面影はありませんが、あの手の巨大建造物を凝視することは生理的にダメだったのです。渋沢は煉瓦の運搬にすぐ近くの利根川を使わず、上敷免から深谷駅まで数キロの鉄道(上敷免鉄道)を敷きましたが、これが日本初の引き込み線といわれています。鉄道はヒトを高い料金で運ぶ高貴な乗り物という概念を破り、モノを運ぶ手段にするという発想はとても斬新だったはずです。小学生の時に通院していた丸山歯科医院がこの鉄道のすぐ脇にあり、煉瓦を積載した貨車が深谷駅に向かうのを何度か見たのを覚えています。上敷免鉄道は昭和50年に廃線となり、線路も取り払われて新たにサイクリングロードになっています。丸山歯科医院も、もうありません。

この地域で鉄道といえば東武熊谷線(現地では妻沼線といっていた)です。旧妻沼町と熊谷駅を結ぶ10km程度のローカル線で戦時中の昭和18年に開業、昭和59年に廃線になりました。敷線の目的は高崎線熊谷駅経由で群馬太田にあった中島飛行機(現富士重工)への機材搬出入でした。ここでも坂東太郎が問題となりました。中流域と

はいえ数百メートルの橋を架けなければならず、また、サイパン島、硫黄島と陥落した後、中島飛行機と坂東太郎の架設工事はB-29による恰好の爆撃目標となったため、妻沼-太田間は完成することなく敗戦を迎えました。子供の頃、太田市と熊谷市をまたぐ国道408号線の橋（刀水橋）周辺の利根川河川敷から不発弾が見つかったり、緑青にまみれた機銃弾の葉莢らしきものや風防ガラスの破片（いわゆる匂いガラス、日本軍戦闘機のものだったと思われる）などを見つけたりしました。軍需目的以外に利用価値無しとの見解があったのか戦後も架橋計画は挙がらなかったようです。当時の面影はほとんどなく、一部のコンクリート橋桁が撤去されることなく残置されているのみです。余談ですが、埼玉県を走る軍需線で生き残ったのがJR八高線です。なんであんな山奥に線路敷設したのか不思議に思いますが、主幹の高崎線がやられたときに東京-新潟間を繋ぐ複線とするのがその目的だと聞いたことがあります。対ソ戦までも考慮に入れていたのかは不明ですが、鉄道は大量物資輸送の要であり、渋沢の上敷免鉄道へと回帰するのではないのでしょうか。

戦後は埼玉北部、特に高崎線以東の利根川流域までの、ネギや野菜作りが有利な環境では畜産が栄えませんでした。農地さえあれば野菜作りが可能で、しかも大消費地東京に近いからです。一方、敗戦以前は米と麦を除けば、東京は遠く地産地消せざるを得ず、野菜作りよりも養蚕が盛んでした。私が小学生の頃でも若干ではありますが養蚕農家がありましたし、そこそこ桑畑があったのを覚えています。母校のほぼ隣には県の養蚕試験場もまだありました。昭和の終わり頃には重機を使って桑の木を根っこごと簡単に処分するように

なり桑畑はなくなっていきました。社会地図の桑畑記号を覚えていますか。今は一般の畑記号と同じに扱われているようですが、かつてはアルファベットの「V」が畑、「Y」の下に右方向に「-」を入れると桑畑。「-」は桑の根っこが地を横に這うのを意味しているのかもしれませんが。桑の抜根というのはそれだけ大変だったということです。一方、畜産が全くなかったわけではなく、近所でも2軒くらい農家のじいちゃん&ばあちゃんが数頭の豚（たぶん中ヨーク）を肥育していたし、なんと隣家は酪農をしていました。30～40頭規模だったと記憶していますが、牛舎（牛小屋と呼んでた）は土手の脇に有り、よく土手に杭を打って放牧していました。牛糞が土手のあちこちにぶちまかれているので土手で遊ぶときは細心の注意が必要でした。そんな牛糞も牛舎から出たものはネギ農家が生肥としてもらい受け、畑の隅に数ヶ月放置し、乾燥した頃にトラクターで畑にすき込んでいました。牛肥のお返しに出荷時に出るネギ、ニンジン、葉物野菜のくずなどを渡しましたが、ネギのクズはあまり喜ばれなかった記憶があります。もちろん濃厚飼料も与えていたので完全とはいえませんが、その時代は地域還元型農業をしていたのです。今では私の実家周辺で酪農や養豚をしている方は誰もいません。農家も高齢化し、農家間の交流も疎くなり農村は近いうち壊滅するかと思っていたところ、地元出身でもない、深谷と縁もゆかりもない、子供が2、3人いるような30、40代の夫婦が2町歩も3町歩も土地を借りて（永小作権はほとんどタダ）ネギ農家を始め、成功しているとのこと。よく深谷ネギ農家の取材でテレビにも出てくるのはそのうちの一家族です。栄枯盛衰。捨てる神あれば拾う神あり。か

たちを変えても農業は残ると思うし、やるヒトはどこからか現れてくるものです。そういうヒトた

ちを直接的ないし間接的に支えていく我々の責任を忘れてはなりません。 (おわり)



取り残された太田一妻沼鉄橋橋桁 (中央やや右)